
いつかのこと

間木良竜哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかのこと

【Nコード】
N0898P

【作者名】
間木良竜哉

【あらすじ】
あらゆる法則の乱立した世界、神の箱庭。その世界の住人は皆、不思議な力を身に宿していた。その力により、ある者は物質を生み出す事が、またある者は自然現象に介入する事が出来たのである。人々はそれを、超能力スベルと呼んだ。様々な種族、様々な思想、様々な能力が交錯した時、神は一体どんな判断を下し、最後に何が残るのだろうか？

第一章 時の環

「じゃあ、切るわ。また暇があつたら電話する」

昨日までと全く同じように、友人は別れの挨拶をした。俺は短く「じゃあな」とだけ返す。

今日もいつもと変わらない一日だった。

朝起きて朝食をとり、学校へ行って授業を受ける。放課後の数時間を友人とだらだら過ごし、家に帰って夕食を食べる。適当に風呂に入り、空いた時間はマンガかアニメかゲームの為に費やす。

本当に変わらない。

これは比喩表現などで無く、事実としてそうなのだ。

その事に気付いているのは俺だけかもしれないし、他に誰か気付いているのかもしれない。ただ俺が言えるのは、既に三十四回“十月十九日”を繰り返していると言う事だ。

何日かかけて確認した事だが、十月十九日の二十三時五十九分から十月十九日の零時へとつながるのだ。

俺の説明では意味が解らないかもしれないが、俺自身も焦りすぎて逆に冷静でいられるくらいの状況なのだ。俺の説明を聞いて混乱するのも仕方無いだろう。こればかりは、実際に体験した者同士でしか共感出来ない事だから。

初めの一週間 正確には七度繰り返した“十月十九日”だが
での検証結果から、周りの人はこの現象に気付いていないと分か
った。そう判断する為の材料は、俺と周りの人との会話などから十
分得られた。

これが俺が住む町の中だけの現象ならばそれはそれでいいが、携
帯電話の電波が普通に届いて町の外に電話が繋がる事や、テレビ等
のニュースでも特に騒ぎになっていない事から、これは地球規模の
現象のようで俺以外は気付いていないと思われる。何とも不思議な
感じだ。

また、一日の行動の大筋は同じだが、人々の言動などは数パター
ン有り、少しずつ変わることも知った。例えば、一昨日の夕食は肉
じゃがだが昨日は麻婆豆腐といった風に、細かい事柄は変化する。
それでも、食えることには変わりない訳だ。総合的にバランスが保
たれている感じがする。

また、前日に行った事は次の日には持ち越されない。まあ、同じ
日の繰り返しなのだから、どこかでリセットされるのは当たり前か。
例外的に俺だけは記憶が蓄積されていくようだが、他は違うらしい。

とまあ、一通りの説明終わり。今日のシリアスパートはここまで。
そんなことより俺は今、自室でパソコンに向かってアニメを見てい
るのである。

なればこの生活も便利なもので、ある意味時間が無限にあるよ
うなものだ。惜しむらくは、新作アニメやゲーム、マンガの続きは
お預けだという事だろう。実に勿体無い。

そんな感じだから俺のヲタク化はハイスピードで進んでいく。

今も、ゆるいアニメを鑑賞しながらはしゃんとしているのだ。

正直言って、もう駄目かもしれない。どのくらいかと言えば、燃え尽きるという単語を訊くと、それが高速脳内変換で萌え尽きるになるくらいだ。

もっと分かり易く言えば、目の前に変なコスプレした美少女が現れるくらいか。これがもう、幼めの体つきにロングの銀髪で、俺の好みの可愛い顔立ちだから余計にたちが悪い。

どうやら俺は、二次と三次の区別もつかなくなるほど浸っていたようだ。

「夜遅くに突然訪問してしまつてすみません。玄関の鍵がかかっていたので、直接入らせて頂きました」

ほら、幻聴も聞こえてきたし。

「本日は、あなた様に是非聞いて頂きたい事があって参りました」

そう、突然だが俺は今日、本格的に痛い子になってしまったらしい。

変化と始まり

「すみません。お話をさせて頂きたいのですが」

少女が俺の様子を伺いながら話し掛けてくる。最近の幻覚は会話も出来るらしい。俺は無視するけど。

さてと、この回が終わったら寝るかな。流石に二時間もアニメを見続けると疲れるからね。

「あー、聞いてますか？」

聞こえん。何も聞こえんよ。俺は今、アニメを鑑賞しているんだ。俺の隣に意味分からんコスプレした少女がいるわけがない。

「あー、聞いて頂きたい事があるのですが……」

銀髪少女は尚も控え目に話し掛けてくる。諦めると言う事は無さそうだ。

しつこいな。まあ、可愛いから許すけど。せめてエンディングまで、いや、後十分でも待つて頂ければ有り難いのだが仕方無い。こはもう、このルートに乗るしかないようだ。これ以上無視するのもかわいそうだし。

「仕方無い、聞いてやるから早く話せ。今日だけだかな。それから、君に与えられた時間は三十分だ。手短に頼む」

動画を一時停止させ少女の方を向いた俺は、一方的に条件を提示

した。

どんな時でも、自分のペースで事を進める為には相手との力関係をしっかりとさせておく必要があるのだ。

「あ、はい。では先に自己紹介をさせて頂きます。わたしは、シャロット・ゲルト・ルートヴィンゲと申します。宜しく御願います」

そう言っただけで彼女は丁寧にお辞儀をする。おれの感想は、名前長いな、外人さんか、だった。

「ああ、俺は荒船涼。よろしく」

つい返してしまうが、丁寧に自己紹介されて何も返さないのも失礼だろうからな。

「はい。存じ上げております。それですね、今回こちらにお伺いしたのは……」

言いながら彼女は肩から提げた鞆の中から分厚い本を取り出す。

何事かと思っただけで眺めていると、

「えーと、確か183ページに……あ、ありました。あのですね、わたしは悪魔と呼ばれる種族で、悪魔は時間の管理者なのですが、この度時の王とのいざこざが原因でこの星の時の流れが狂ってしまいました、それを直す為には、星の代表として選ばれた方を連れて時の王との交渉の場に望まなければならないと言っ事でした」

その本をカンペにして話し始めた。

話の内容どうこうよりも、それを全く覚えずにここへ来た事や、必死に本を読んで説明してくれている姿が可愛すぎて萌えた。

「 今代の星の代表が荒船様なので、是非ともわたしと共に異界に渡って頂きたく、こちらに参りました所存です」

なん……だと……！？

「……そうか」

それはつまり、俺が選ばれし者だと言う事だろう。そうに違いはない。やばい、にやにやしそう。いや、でも今は真面目な雰囲気だから自重しないと？

「すみません。ショックを受けられる気持ちは分かります。ですが、こちらとしては是非とも」

「 くくく。ついに来たか！！」

ダメだ。笑いが止まらない。

「！？」

ごめん、驚かせちゃったのは俺のほうだな。

「俺はずっと待っていたんだよ、何時かは俺にもファンタジックな出来事が起こるんじゃないかと……！ 世界は今こんな状態だ。その中で俺だけが無事だった。なら、何も期待しない方が可笑的いだ

る？」

「あ、あのー……」

「……ごめん、舞い上がりすぎた。続けてくれ」

ほんと、悪いことしたわ。彼女には三十分しか与えてなかったのに、俺のせいで何分かロストしたからな。

「あ、はい。ですが、信じて頂けたようで何よりです」

そうして太陽のように眩しい笑顔を向けてくれる彼女。いや、それだと眩しすぎて見られないから、一番星位と言っておくか。

「では早速、こちらの注意書きをご覧になって頂いてから、契約書や誓約書など諸々の書類を四枚ほど記入して貰いたいのですが」

続けて彼女はカバンから数枚の紙を取り出す。ファイルに挟んでいた訳でも無いのによくシワにならなかったなと思ったが、口には出さない。

「ああ。別にいいけど」

それを俺は受け取り、ざっと目を通す。

なになに、注意事項？

以下、“時の王との会談”に向かうに当たり、契約者の留意すべき点を記す、とな。

一（契約者の生命に関わる事態が起こった場合、当方は一切の責任

を負わないものとする。

二) 契約者は協力者となる悪魔を常に同行させるものとする。

三) 契約行動中、契約者の行動には制限を設けないものとする。

四) 契約書は十分な理由が無い場合、契約を破棄する事が出来ないものとする。

五) 契約内容は予告無しに変更される場合があります。

契約者は俺の事で、当方つてのは悪魔さんの事でしような。内容を要約すると、好きに動いていいけど、悪魔を連れて動かなければいけないし、向こうのお偉いさん方は責任を取らない、と言う事らしい。これ、わざわざ書類にする必要あったか？

ま、いいわ。俺は自分のやるべきことをやるだけさ。じゃあ軽くサインして、と。

「印鑑はどうするの？ 普通に捺しちゃって平気？」

「あ、出来れば血で捺して頂けると有り難いです」

「分かった。血ね」

「ってなんですか。」

「めっちゃ自然な流れで会話してたけどおかしいだろ！！俺もノリが軽かったと思うけどさあ」

「何がですか？」

彼女はそう言って小首を傾げる。いちいち仕草が可愛いから困るな。

「いや、アニメや小説なんかだとこんな手続きじみた事はしないから」

「ああ、あれは等級が低い方だからですよ。普通は書類を書いて手続きするんです。口頭で契約が結べるなんて今時無いですよ」 おい、夢を壊さないでくれ。だが、ここは気を取り直してだな。

「へえ。初めて知ったよ。それって、悪魔だけの話しか？」

取りあえず質問してみた。と言うか、俺って意外と冷静だよな。これだけ立て続けに色々な事があって、今更焦るのもおかしいが。

「いえ、悪魔だけに限って言えば書類手続きからの契約が必要ですが、他の上位管理種族はまた違った方法を取っていると思います」

真面目な解説をありがとう。でも、半分も理解出来なかったわ。さつきから専門用語多すぎる。

「では、次の質問。君は本当に悪魔か？」

一転して真面目な雰囲気を出した俺は、真っ先に確かめるべきだった事柄を尋ねた。数分前までの俺は血迷っていたようだ。

「……確かに、あっさりと信じて頂ける筈は無い、と心のどこかでは思っていました。私の直属の上司にも日頃から言われていた事で

すから。では、少々遅れましたが、改めて私が悪魔である証拠をお見せいたしましょう」

一瞬の沈黙の後に彼女はそう告げ、またもやカバンから何かを取り出す。そして、取り出した何かを俺の前に彼女は差し出し、

「どうぞご覧になって下さい。これが私が悪魔である事を証明する為の証拠です」

と続けた。

俺はその四角い物体を受け取り、覗き込む。

「ん？ 写真？」

どうやらそれは写真立てのようで、中の写真には彼女と、彼女に顔立ちのよく似た家族だろう方々が写っていた。どう見ても家族でコスプレしてるだけですけどね。

「はい！ こっちが私のお父さんで、こっちがお母さん。それからこれがお姉ちゃんです」

「いや、もういい。もう分かった。君の家族の仲がいい事はよく分かった。それから、口調が変わってるぞ」

このままにしておけば彼女は家族とのハートフルストーリーを語り初めて延々とそれを続けるだろうと判断した俺は、早めに話を打ち切る。それでも、可愛い彼女の話だったらいくら聞いてあげてもいい、と思う俺がいて滑稽だった。

「はづう。す、すみません」

ただ、彼女は違ったようで、小さな声でそう言って思い詰めた顔をして俯いてしまう。

どうも俺が想像していた以上に彼女は落ち込んでしまったようで、この写真を見せれば信じて貰えると本気で思っていたのだと分かった。

「悪い。少し言い過ぎたかもしれない」

軽い罪悪感を覚えた俺は、一応謝る。だが彼女に俺の言葉は届かなかったようで、依然として俯いたままだ。

今まで女性とお付き合いした経験の無い俺には、このような状況に対応する術が有るはずも無い。実に困った。

「ふふふ」

どうしようかと心の中では大変焦っていた俺の耳に、怪しい声が届く。

何事かと彼女を見れば、不敵な笑みを浮かべているではないか。

「クスクス。あれで信じて頂けないとなると仕方ありませんね。…
…こうなったら、最後の手段です」

彼女の纏う雰囲気が一気に変貌した事に驚きつつ、俺は様子を窺う。

「さあ、その身に喰らいなさい！ 我が家に代々伝わる四十七の秘奥義の一つ、“蓮華”！！」

「おい！？ ちょっと待て」

様子を窺いながらも大丈夫だろうと油断しきっていた俺は、彼女の動きに反応出来ずに一方的にされるがままとなる。

彼女の言う蓮華とは所謂くすぐりの事で、その手の技にはとことん弱い俺は抵抗する事無く敗北したのである。

安全確認

「どうです？ これで私が悪魔だと言う事を信じる気になりましたか？」

暫くの間彼女の技を受けていた俺は、力無く頷くのがやっとだった。これじゃあ証拠になっていないと心の中で思うが、口に出す事など出来ない。

てか、落ち込んだフリしてふいうちとか酷いだろ。まあ、可愛いから許すけど。

それからなんとかして気を持ち直し、会話を再開させる。

「分かった。君の言動は全て信じよう。それはこれからも変わらないと約束する」

何だか俺と彼女の力関係が入れ替わってしまったようだ。が気にすまい。女の子にイジメられるのなら許せるし。

「そうですか！ それは良かったです。……最悪、洗脳する事になる可能性もありましたから」

不吉な言葉も聞こえたが、空耳と言う事にしておく。恐らく、悪魔達の業界ではセンノウと呼ばれる偉い方々を招いての講習会があるのだろう。

「じゃあ、君が悪魔だと言う前提で、俺が星の何たらだと言う事も本当だとして話を進めようか」

このままだったらと話しては埒があかないと考えた俺は、適当にリードして会話を進めていく。

「昨日まで……、いや前回の十九日までか？ もういい、面倒だ。昨日にしよう。昨日までは現れなかった君が、どうして今日になっていきなり現れたんだい？ 無限ループが解消された訳じゃ無いんだろ？」

「は、はい。まだ時の流れが正された訳では無いです。今は我々悪魔の権限で、無理矢理この星に介入しているに過ぎません。……それから、昨日まで来られ無かった理由はですね、手続きに手間取ってしまったからでして……。それから、少々道にも迷ってしまっています」

途中から、ちょうど言い訳を始めた所から声を小さくした彼女は、最後には目を伏せ呟くようになった。

つまりは、色々揉めていて対応が遅れたと。まあ、何故か知らんが責任の一端は俺にあるようだ。この町は都会から少し離れた準田舎に分類される土地（これは俺の勝手な分類）だから仕方無いと言えば仕方無いが。

「分かったから、そう落ち込むな。気にしてないから。で、俺はこれからどうしたらいいんだ？」

実はこれが一番気になっていた事だ。基本的に、ファンタジーな物語の主人公には二種類のタイプがある。巻き込まれ型（別名首突っ込み型）と、シンデレラ型だ。前者は、強制イベントを含めて何

かしらの事件などに関わる事によりファンタジーへと浸っていくタイプ。後者は初めからファンタジーの中にいて、何かのきっかけを本にして成長していくタイプ。だから何だと言われたら別に意味は無いと答えるしか無いが、俺の統計上そうなっている。

そして、現在の俺の状況は明らかに巻き込まれ型だ。このタイプは非常に厄介で、次から次へと問題が起こる。更にシンデレラ型とは違い、主人公にバッドステータスが付く場合が多い。なので、早めに自分の置かれている状況を見極めて対策をとっていかなければならないのだ。

「はい。えーと、ですね。確か214ページに……」

彼女も把握していない情報が所々あるのか、再び本のページをめくる。俺の所へ来た悪魔が彼女だと言う時点で、既に不幸なのかもしれないと密かに思う。

「ええと、ありました。あなた様にはまず、異世界 神の箱庭へと行って頂きます。こちらの世界である程度の準備が出来次第、出発したいと思っています」

探していた情報が見つかったのか、そのページをしっかりと見ながら答えてくれた。

「なるほど、分かった。じゃあ、その異世界とやらの危険度は？ 因みに、俺は運動は得意では無いからな」

少し自分の中で考えた後、次の質問をする。これには直ぐ答えてくれた。

「危険度、と言う物がどれほどかは何とも言えませんが、この星地球よりは危ないかもしれません。それから、あちらにはスペルと呼ばれる超能力のような物があるので、やっぱり危ないかもしれません」

何とも微妙な回答だが、よしとしよう。危ない事は分かった。

「色々ありがとう。だいたい分かった。また何かあったら訊くよ」

まあ、後は現地で情報収集すればいいだろう。取りあえずは動きやすい格好に着替えてからだな。今はパジャマ姿だし。

「直ぐに着替えて準備するから、そこで待っていてくれ」

女の子を部屋の外に追い出して着替えるのはどうかと考えた俺は、自分が外で支度する事にした。無駄にイベントを起こす必要も無いし。

なので、俺の考え得る一番まともな服、高校の制服を手に取り部屋を出た。

彼女に言った通り、五分もかけずに着替えを終えた俺は部屋に戻る。動きやすさは普通だが、温度調節機能はなかなか制服のポケットにハンカチなどを突っ込み、支度が出来たと彼女に告げた。

驚いたような顔を彼女は一瞬だけしたが、直ぐに元に戻って「では、行きましょう」と返してきた。

「ところで、どうやって行くんだ？ ついでに聞くと、俺が向こうに行っている間こっちはどうなるんだ？」

それを聞いてから、ふとわいてきた疑問を口にする。

「行き方は簡単です。道がありますから。それから、あちらの世界に行っている間こちらではこの“身代わり君”にあなたの代わりにして貰います」

「道って何？」

身代わり君なる物にも興味がわいた俺だが、先に道について尋ねる。俺の安全に大きく関わるのは明らかにそちらだったからだ。

「えーと、道とはですね、『人や車の通る所。道路。物の通る所』です」

「いや、それは知ってる。俺が聞きたいのは、異世界に繋がってるような物がその辺に普通にあるのか、と言う事でだな」

「ああ、なるほど、そうでしたか。でしたら、普通にありますよ。この星の人間はそれを認識する為の機能を持ち合わせていないだけで、道自体はどこにでもあります。後は通行証があれば、それに対応した世界に行く事が出来ます」

ほう、また専門用語か。だいたい理解出来たが、やはり実際に行ってみなければ分からない事は多いな。

「じゃあ、最後に確認だ」

これは念の為の確認だ。心配性な俺は何度でも確かめなければ気が済まない。

彼女が頷いたのを見て続ける。

「まず一つ目。俺は異世界に行つて時の王に会い、この不思議な現象を止める」

格好付けて右手の人差し指を立てて言う。

「はい。そうです」

すかさず彼女も返す。

「二つ目。俺が異世界にいる間もこっちに変化は無い」

人差し指はそのまま、次は中指を立てる。

「はい。現状が維持されます」

うん。いい答えだ。

「三つ目。俺はこれから君の事をシャロと呼ぶ」

今度は薬指を立てる。これが最後の確認だ。

「は……い？ え！？ どう言う事ですか？」

彼女は大分戸惑っているようだ。そんなあたふたしている姿も可愛い。俺は指を戻してから理由を説明する。

「君”じゃあ他人行儀だし、“シャーロット”だと長くて面倒だ

からな。シャロが一番呼びやすい。まあ、嫌ならやめるけど」

「い、いえ。そんな事は無いです。ただ、今まで愛称で呼ばれた事が無かったので、少し戸惑っただけです」

「なら良かった。それから、俺の事は適当に呼んでくれていいから。じゃ、行こうか」

どうやら、シャロで呼び方は安定出来そう良かった。準備は整ってるし、後は出発するだけだ。

「はい!! それでは出発しましょう、荒船さん」

……さてと、これ以上面倒事に巻き込まれずに終わるように祈るかな。

次々と来る出会い

地球を出発したのは真夜中。道は意外と短くて、数分歩いただけで異世界に到着した。どうやら地球とこちらでは時差があるようで、現在は十一月二十四日の早朝だ。肌に触れる空気が冷たい。

「ずいぶん近いんだな、異世界ってのは」

周りの景色を見渡しながら俺はシャロに話しかける。いつになくやる気を出していた為に、拍子抜けしているのが現状だ。

「利便性を向上させた結果です。ただ、そのせいで地図は読みにくくなりましたが」

それに対してシャロは冷静に返してくる。とは言え、見知らぬ森の中で迷子になっている今、俺たちが割とピンチである事は確かだ。

「なあ、シャロ。もう一度訊くけど、ここは目的の異世界なんだろう？」

「はい。そのはずですよ」

「で、今は迷子だよ」

「はい。その通りですよ」

はあ、と短くため息をつき、俺は地面に腰を下ろす。

これは完全に想定外だった。まさかシャロが自分が通って来た道

を覚えておらず、さらにあれだけ頼りにしていた本を見間違えるとは。

「まあいい、こんな事はよくある。シャロも座って、それからどうするか考えよう」

「す、すみません」

地図とにらめっこしていたシャロは、一言謝ってから俺の前に座る。

「さて、君は何か役立ちそうな物を持っているかい？　俺は何も持っていないんだけどさ」

「えーと、私の手元にあるのは、この『異世界を歩こう』と、『よくわかる！　これであなとも上級悪魔〜応用編〜』、それから時計です」

「……そうか、君は頼りになりそうではないのか」

幸い、連日徹夜でアニメを鑑賞する生活をしていた俺に眠気は無い。頭も働いている。だからこそ言えるのは、現在地がどこだか分からない以上地図など役に立たない、と言う事だ。

「ちょっと借りるよ」

そう言っつて、俺はシャロの持っていた『よくわかる！　これであなとも上級悪魔〜応用編〜』なる本を手取る。

何の気なしに行ったのだが、直ぐにそれは間違いだと知った。そ

もそも、そんな未来を想像出来るやつなんていないだろうが。何
と言う不思議か。俺が右手で触れた本が淡く白い光に包まれ、崩れ
るように消えたのだ。

「あ！ あー！！」

それに気付いたシャロが大きな声を上げる。俺の方が驚いたくら
いの声だ。

「忘れていました。星の代表は、別の星へ行つた時その星に対
応した特殊な力を得るんです」

「おい、つまりこれは……」

「はい。スペルです。詳しくは分かりませんが、かなり危ない類の
物かもしれません」

シャロはそう口にしながら、少しだけ俺との距離を置く。俺は愕
然とするが、次の瞬間には頭で理解した。触れただけで物が消えた
のだ、これが危なくない訳無いだろう。

「シャロ、これはどういった力何だろうか。もっと詳しく説明を頼
む」

「……無理です」

動揺を隠せない俺にシャロが言ったのは、さらに絶望的な言葉だ
った。

「本が消えましたから」

これはつまり、完全に路頭に迷ったと。なすすべ無しだと言う訳か。

「で、ですが、こんな事もあるうかと準備していた物が一つだけあります！」

焦りながらもシャロがカバンから取り出したのは、黒いゴム手袋だった。

「何それ」

率直な感想を口にする。

「これはかの有名な暗黒商事が世に送り出した至高の一品、“能力抑える君”です」

イタイ。ネーミングセンスがイタイ。だが、何もなによりマシだ。奪うようにして左手で受け取る。

「これを着ければ問題無いんだな？」

右手に慎重に着けながら訊く。触れた時点で消えていないので、大分信用は出来た。

「能力を最大の約八十パーセント抑えるだけですが、かなり変わると思います。ただし、それにも寿命があります」

「いや、ナイスだシャロ。これですいぶん安心して暮らせる」

気を抜いた俺はお礼を言いながら、試しに近くにあった小石を手取る。

数秒触れても平気だったので安心すると、見計らったかのように白い光に包まれて消えた。

「おい、消えたぞ」

「い、言ったじゃないですか。力を抑えるだけですって。触れ続ければ当然消えますよ」

怒ったような俺の声にビクビクしながら返すシャロ。確かにその通りだ。

「ごめん。別にシャロがわるい訳じゃないよな」

「は、はい」

「まあ、この話は終わりにしよう。俺が気を付けられただけだから」

まったく、これで俺が両手が利き手だったら格好いいんじゃないか病を発症していなかったら大変な事になっていたな。

「……それでだが、先ずはこの森を抜けようと思うんだ」

「私もそう思います。ですが、適当に歩いているだけでは余計に迷うのではないのでしょうか？」

確かにシャロの言い分はもっともだ。しかし、俺にも考えがある。

「周りを見ていて気付いたんだが、ここだけ草が生えていない。つまり、動物の通り道になってるって事だ。まあ、それが人とは限らないがな」

俺は自分の座っている所からその先までを手で示しながら説明する。シャロも気付いたようで、自然と表情が明るくなる。

「では、これを辿って行けば森を抜けられる可能性が高いと言っ訳ですね。流石です！」

「別に大した事じゃないさ。それに、俺達がやるうとしてるのは結局、最初からやってた事なんだから」

自分で言ってみなしくなったが、実際そうなのだ。俺達は初めからここを通って歩いてきたのだから、悩む必要も無かったと言える。

ただ、森を抜けられたとしても現在地が分からなければ目的地へ行く方法も分からないのだが。

「じゃ、さっさと行くか。せめてお昼ご飯は食べたいからな」

そこまで空腹を感じてはいないが、腹が減ってはよい考えも浮かばない。それに、定時には何か食べたいと考えるのが、飽食の国日本を生きる若者の普通の考えだろう。

「はい。それで」

「た、助けて下さい！！」

これから新たなスタートを切ろうとしていた俺達の会話を遮る声。何かと思っで見れば、ちょうど俺達が進もうとしていた方向から誰か来るではないか。

目が隠れる程に伸ばした前髪を風で乱しながら駆け寄って来る少年。ボロボロな服を身にまとっていて、その走り方からは相当焦っている様子が窺える。

「おい、どうしたんだよ。そんなに焦って」

少年が俺の目の前でよろけて転がりそうになるのを両手で支え、直ぐに立たせて手を離す。

「見知らぬ旅の方。どうか、僕を助けて下さい」

俺が話しかけるも、少年は助けを求めるばかりで会話は成り立たない。

どうするべきか悩んでいると、シャロが声を上げる。

「あ、あれを見て下さい！」

シャロが指差した先を見れば、体の上から下まで白一色の服を着た数人の男達が、こちらに向かって来ているではないか。このタイミングと彼らの様子からして、白服が少年を追ってきたのは明らかだ。

「シャロ、俺達は運がいいみたいだな。こんなに沢山の人が迎えに来てくれたんだから」

確実に巻き込まれコースを進んでいると感じた俺は逃げようと言
う考えを無くし、気を紛らわす為の冗談を口にした。

二転三転

「その少年をこちらに渡して貰おうか」

白服の内の一人が口を開く。こちらは三人に対してあちらは六人。数的有利に加えて俺達が抵抗しない事で、白服には余裕があるようだ。

「それはいいが、渡した後俺達はどうなる？ 見逃してくれるのか？」

シャロと少年は空気を読んでくれているのか声を出さない。俺からすれば、「私達には無理だから、荒船さん頑張つて」と丸投げされた気持ちだが。

「少しでもこの件に関わった以上、何も知らなくとも身柄を拘束する事にはなるだろうな。その後は長の判断次第だが」

「そうか。じゃあ、大人しく捕まるわ」

あっさりと降伏した俺に一瞬だけ拍子抜けした様子を見せる彼らだが、その後の手際は良く直ぐに縄でぐるぐる巻きにされた。

逃げようと思えば逃げられるのだが、逃げた所で追われる事は分かりきっている。そして、道も分からない。

この場合は抵抗せずに捕まった方が得だと俺は判断したのだ。

「私達、これからどうなるんですか？」

シャロが小声で尋ねてくる。初めはこの悪魔を頼りにしていた俺だが、この世界に来てから当てが外れた。

「大丈夫だ。いざとなればスペルを使って逃げるから」

対して、俺も小声で返す。この数時間で既に耐性がついたのか、恐怖心などは無く冷静でいられた。

白服の男達に囲まれながら暫く歩いていくと開けた場所に出た。木々に周りを囲まれている点から考えて、まだ森からは抜けていないようだ。

「今から長の所へ行く。余計な事をするなよ」

白服の一人が俺達に向かって言った。周りをよく見れば、小さな建物がちらほらと建っている。俺の乏しい知識からして、村里のようなものだろうか。俺達の他に人の姿は見えない。

彼らに連れられて、いくつかある建物の中で一番大きなそれに入る。

一番とは言え、その見た目は日本で山小屋と呼ばれているような形だ。決して豪華ではない。

中の広さは人が十人も入れれば窮屈さを感じる程度。家具の類も長が座る木製のいす以外は置かれていない。

「裏切り者と、森にいた旅人を連行いたしました」

長と言う方には髭面のじいさんだろうとの予想は裏切られ、そこに座っていたのは中年の男。坊主頭のために若く見えるが、十年はとっているだろう。眼光は鋭く、獲物を狙う獣のよう。座っている体勢からでも背が高い事が分かる。

一言でまとめると、危ない人だ。

「解った。もういいぞ、下がれ」

そして、あるうことが俺達と一切の会話をする事無く部屋からの退室を命じた。

「この者達はいかが致しましょうか？」

白服も判断に迷ったのか、長に尋ねる。

「村外れの納屋に入れておけ。処罰は後で行う」

「かしこまりました」

その会話も短く終わり、俺達は外に出る。訳も分からず納屋と呼ばれた小さな建物に三人で入れられ、外から閉じ込められた。俺はその手際の良さにただ感心するだけだった。

「どうしましょうか？」

心から不安そうな声でシャロが話しかけてくる。正直な話、普通は俺の方がシャロを頼るのではないだろうか。

「そうだな……。なあ、君の名前は何て言うんだ？ 俺には荒船涼
って名前があるんだが」

ひとまず少年に話をふる。今回の件は明らかに彼から始まってい
たからだ。

「……リク」

小さな声だったが、一応聞き取れた。

「そうか、リク君か。じゃあ、単刀直入に訊くけど、君は何をした
んだい？」

彼は裏切り者と呼ばれ、白服に追われていた。そこには何か理由
があるはずで、巻き込まれた以上は知りたかった。

「……」

「まあ、話したくないならいいよ。俺達は俺達で勝手にやるから」

俺の質問に対してリクは沈黙を貫いた。俺に怯えているのか単に
話したくないだけなのか分からないが、答えなかった事は事実。

それはつまり、

「シャロ、ここを出よう」

俺達に頼る気は無いと言う表れだろう。

身を擦らせて、体を縛り付けるロープに右手を触れる。数秒経つ

と手の触れた部分が消滅し、千切れたロープが床に落ちる。同じ様にシャロのロープも消してやり、体を自由にさせる。

これで八割カットされた出力だと言うのだから、かなり不気味な力だ。それと同時に、ゴム手袋の優秀さを再確認した。

「上手く出来るか分からないが……、まあやってみるか」

一人呟き、入り口とは反対側の壁を向く。これが触れた物を消せるスペルならば、壁に穴をあける事も可能だろう。

やりすぎたら困るから手袋は着けたままで。指でなぞるようにしてゆっくりと壁に四角を描く。大きさは一メートル四方程度をイメージする。

思いの外上手くいき、ダンボールをカッターで切り抜いたように壁に穴があく。

「じゃあ、出ようか」

俺はシャロに優しく話しかける。

「は、はい」

状況に付いて来れていないのか、答える声に力が無い。

仕方無いか。俺だって、こつも目まぐるしく状況が変わっては、対応するのがやっとで理解は出来やしないから。

逃走ルートを早く見つける為、俺が先に納屋から出る。

出た所で辺りをキョロキョロと見回すと、ある一点で視点が止まる。

俺は運が良すぎるようだ。何度目か分からないがそう思った。

まさか、壁を壊した先に長が待っていてくれるとは、誰が考えるだろうか。

「どうしてあなたがここに　！？」

出口で立ち止まってしまっていたため、後から来たシャロに頭突きを喰らわされる。もう少し注意して行動してほしいものだ。背中が痛む。

「うー。……荒船さん、そんな所に立っていたら危ないですよ」

まあ、俺が痛いつて事は彼女も痛いと言う訳で、頭を押さえながらそう言ってきた。

「ああ、ごめんよ。こっちはそれどころじゃ無かったから」

一言謝り、長の方に向き直る。彼女も気付いたようで、気を引き締めたのが分かる。

「君達がそこから逃げ出す事は分かっていた。もっとも、予想していたよりは早かったがな」

「どうしてそう言い切れるんですか？俺達が大人しくしている可能性もあつたはずなのに」

いかにこの場から逃げ出すか。それを考える時間をかせぐ為に会話をつなぐ。内容なんてどうでもよかった。

「君達の記憶を覗かせてもらった。君達の目的、今までの行動から未来は推測出来る」

「!?!」

しかし、直ぐに俺の思考は止められた。衝撃の事実によって。

記憶を覗いた。つまり

「君の右手は厄介だな。しかも、本人ですら扱いきれていない」

俺の隠していた事は全てバレたと言う事が。恥ずかしい思い出も全部。これはひどい。

だが、分からない点もいくつかある。

「どうやって記憶を？」

そうなのだ。人の心を読んだり記憶を覗いたりする力の存在など、そう簡単に信じられる物では無い。第一、方法があるかすら怪しい。と言っか日本には無かった。

「簡単な事だ。君も知っているだろう？」

「……スペル？」

「そつだ。君が物を消せる様に、記憶を読む力があっても可笑しくは無いだろう?」

マジか? スペル何でも有りだな。

「まあ、驚くのも仕方無い。君はこの世界に来たばかりだから」

啞然とした顔の俺を見て長は言葉を続けた。そう言えば、長は全部知っているんだつた。

「目的は何ですか?」

逃げる事を知っていて待ち伏せしたのだ。何か目的があるに違いない。

「頼む。君達の旅にリクを連れて行ってくれないか」

「はい?」

思わず聞き返した。予想を超えた話だった。

「リクにはこの里は狭すぎるんだ。それに、外の世界に興味を持つ年頃でもある。もう一度頼む。リクを君達と一緒に連れて行ってくれないか」

今度は長の言葉の意味が分かった。しかし、里がどうのこうののだとか、そつちの事情はよく分からない。

「なあ、シャロ。どうしたらいい?」

「わ、私ですか！？ ……私は、荒船さんの好きなようになさるべきだと思います」

急に話をふられて一瞬慌てた様子を見せるも、最後は俺に一任してきた。君に聞いた俺が悪かったよ。

「取り敢えず、みんなで話し合いましょう。答えはそれから出します」

結果的に、俺は先延ばしを選んだ。

再出発

この里に来て始めに入った小屋。ここでは現在進行形で俺、シャロ、里の長、リク君の四人での話し合いが行われている。

「つまり、この里の人々は反神教と呼ばれる宗派の方々に、世界の大半が神を信仰する宗教な為にひっそりと生活せざるを得ないと。さらに言うと、リク君はそんな里での生活が嫌になって掟を破り外に出ようとしたと」

今までに行われた説明を要約すると、どうやらそうなるらしい。怪しい言葉ばかりで理解に苦しむが。

薄暗い山小屋もどきの中にいる為時間は分からないが、腹時計的に正午過ぎだろう。

俺としては逃げてしまいたいところだが、シャロがいる上にこの世界の地理が分からない。なので、逃げられない。

かといって、リク君を連れて行くのも憚られる。

さて、どうしたものか。

「リクは優秀だ。君達の役に立つと思うよ」

俺の気持ちを知ってか知らずか、長はさっきからずっとその調子だ。まあ記憶を覗いたのだから、俺達の目的や個々の能力から足りないものを考えて、別の何かで補わせようとさせるのは的外れではないと思う。

シャロはと言えば、「荒船さんの好きなようにして下さい」状態で頼りにならない。困った時の相談相手がないのは辛い。

「……分かりました、連れて行きましょう。 ですが！ こちらにも条件があります」

悩み抜いた俺の出した結論。それは、とことん自分が得をする為の案だった。

「 三人分の食料を三食分。 町で一週間は最低限の暮らしが出来るだけの旅費。 この場所の周辺の地形が分かる地図。 それでいいのか？ 」

「 ええ。 十分です。 後はリク君の力があれば順調に旅が出来るでしょう 」

確認の意味を込めて俺の提示した条件を繰り返してきた長に、うまくいったと内心でほくそ笑みながら答える。

我ながら恐ろしい策だ。 自分に無いものを他人が持っていたならば、その他人の力を借りればいい。 それだけの事だ。

「 ありがとう。 これでリクをこの里に無理やり縛り付ける必要は無くなった。 リクには、広い世界で活躍して貰いたい。 今まで大人の事情を押し付けて悪かった。 荒船君と悪魔ちゃんは本当に良い所に現れてくれた 」

「いえ、そんな事は……」

長の持つ謎の勢いに負けないように何か言葉を返そうとして気付く。……あれ？ これってもしかして、利用されたのは俺の方？

「では、善は急げだ。早速出発した方がいい」

長はふとわいた疑問を口にするのを許さない。

どこにいたのか、白服がリュックサックのような物を持って現れる。その膨らみようからして、俺の言った物は用意されているようだ。手際がいい。

そして、そのまま俺達は背中を押されるように急かされて里の出口 ちょうど森の手前まで来てしまう。

「あの一。これは一体？」

「少年よ、頑張りたまへ」

そして、長はそんな捨て台詞を残して白服と共に里に消えた。

ヒューっと言う風の音が聞こえそうなくらい、閑散とした景色に感じた。

「……長はああいう人です。色々と言いたい事はあるでしょうが、歩きながらにしましょう」

急によく喋るようになったリク君を不思議に思わないくらいには、俺は混乱していた。

「で、リク君はどうしてそんな服装なの？ そんなに悪い事したの？」

リユックサックを左肩から提げながら、俺は歩いていた。リク君はこの森の道に詳しいようで、先ほどから先頭を進んでいる。シャ口よりはよっぽど役に立つのではないだろうか。

「いえ、これは僕の趣味です。　　って、他に訊く事無いんですか？」

「ああ。それが一番気になってた所だから。何やったらあんなに追われるのかな、と」

「ちょっと暴れて逃げ出しただけですよ。あんな意味の分からない世界に閉じ込められていたら、誰だって嫌になるでしょう？」

「そう言うものか？」

「そう言うものです」

続いていた会話が途切れる。何か話さないと気まずいのだが、何も思いつかない。

しばらくの間、土を踏む音だけが辺りに響く。

「ところで、今いる場所はどのあたりなのでしょう？」

いつの間に取り出したのか、その手に地図を持ったシャロが口を開いた。

「えーと、……ちょっと借りますよ」

少しだけ考える素振りを見せた後、リク君はシャロから地図を受け取る。それからパラパラと何枚かページをめくり、適当なところで止める。どうやら見付かったようだ。

「このあたりですね。水の大陸で三番目に大きな都市に続く街道沿いの森の中です」

一旦足を止めて、リク君が開いたページを三人で見つめる。

正直、よく分からない。

「で、ここからだとその都市までどの位かかるんだ？」

「まあ、半日と言つところでしょうか。今、丁度正午頃ですから、急げば夜には着くのでは？」

「なんか、他人事みたいな言い方だな」

あまり気持ちのこもっているようには感じない言い方に、俺は思わず言っていた。

「実際他人事ですから。それに、僕一人ならもつと速く進めますし」

「まあまあ、二人とも落ち着いて下さいよ。ケンカはダメです」

俺達の話し方から不穏な空気を感じたのだろう。シャロが止めに入る。

「シャロ、心配しなくても俺は大丈夫だよ。簡単には怒らないから」

「そうですか？」

不思議そうに返してくる。何か疑われるような行いをしたか？

「そうです。大丈夫です」

まあ、そこは優しく言うておく。

「……それで、どうします？ この辺で休憩をとって進むか、このまま行くか」

「ああ。俺としては急ぎたい。だから、休憩にしよう！」

腹が減っては戦は出来ない。いやあ、素晴らしい言葉だ。

その時、こいつバカなんじゃないのか、みたいな目で見られていた気がするがきつと気のせいだな。

町に着いたら

里で用意してもらった食料をおいしく頂き、俺達はまた歩き始めた。食料の中に生物はほとんど無かったので、あまりは何日か保存しておけそうだった。

「なあシャロ、この世界ってどうなってるの？ 水の大陸とか何？」

一人で先を行くりク君と付かず離れずの距離を保ちながら、隣のシャロと会話をかわす。

「地図を見た限りでは、三つの大陸から構成される世界なようです。空、水、土とあって、今いるのが水の大陸と言うわけです」

「時の王様ってのはどこにいるのかね？」

「うーん。……どこでしょうか？」

何だかんだ言って、俺達には情報が足りない。シャロが全て知っていて俺のサポートをしてくれるものだと思っていたが、どうやら違ったらしい。

これはやはり、あの本を消したのが不味かったか。

「仕方ないな。まあ、町に行けば分かるかもしれないから大丈夫だろ」

「あ！ 一つだけ手がかりがあります！」

何かを閃いた様子のシャロ。これは期待出来るのか？

「何？」

「時の王の元へ行く為には通行証が必要、……だった気がします」

「ほう。なるほどな」

話してる途中から自信が無くなったのか、保険をかけるシャロ。そんなところも可愛い。

ただ、仮に通行証が必要だとすると、道を通る必要があるのか。また、誰の許可が必要なのか。謎は深まるばかりだ。

やはり、出発前にもっと詳しく聞いておくべきだった。

「ねえねえ、リク君。ちょっと聞きたいんだけどさあ」

「……何ですか？ 早く言って下さい」

数歩前に行くリク君との距離を一気に詰め、俺は彼の隣から質問する。

てか、すごく嫌そうだな。絶対友達少ないよ、リク君。

「ああ、あのさあ。リク君は何か目的があって俺達と一緒にいるのかい？」

「……それは違います。あの里から抜け出そうとしていた時に、たまたまあなた方が現れ、長の意向があって僕がここにいる。それだけです」

直球で聞いた俺にリク君が返したのは、今までの説明と何ら変わりの無い素っ気ない答えだった。

いよいよもって、信用出来ない流れになって来た。

シャロは情報を持っていない。リク君は訳ありっぽいけど話してくれない。長とか里とかはそもそも意味が分からない集団。俺自身の能力も詳細不明。

はじめは簡単な事だと思っていたのに、すでに先行き不安だ。

ああ！ 神は優秀過ぎる俺に嫉妬して、試練を与えているのだろうか！！

どれほど足を動かし続けていたのか分からないが、森を抜け、街道を進み、町へ辿り着いた。

リク君の言っていたように、夜までには辿り着いたわけだ。もっとも、辺りは薄暗い。正確には分からないが、あの里から時間にして四時間は余裕で歩いたのではないだろうか。

インドア派の俺には相当つらい旅路だった。明日は筋肉痛だろう。町へ来る途中を通った街道はレンガのようなもので整備されている、地図のような物がある事から推測して、それなりに文明は発達しているだろうと考えていたが、予想以上だった。

水の大陸で三番目に大きいと言う都市　サフィールは、商工業の発達した町だった。

この町は、主に三本の通りから出来ているらしい。

まず第一に、町の中心を行く大通り。商業の道だ。

これは他の通りにも言える事だが、下は石畳になっていて歩きやすいようにしっかりと整備されている。日本の道路のようなアスファルトでは無いが、これはこれでいいのだろう。

そして、両側に何かの店だと思われる建物が建ち並んでいる。これが昼間だったならばもつと賑やかな雰囲気だったのだろうが、今は落ち着いた様子の空気が流れている。まあ店の中までは見えないので、外に人がいないだけで中で騒いでいると言う事もあるが。

次に、工業通り。ここには、工業団地などの他に大陸内移動用の列車があるらしい。今後のために後で詳しく調べておきたい代物だ。そして、最後は住宅地のある通りだ。町の住人達が住んでいる家だけでなく、旅人のための宿泊施設もそこにあるそうだ。

それらの通りが小路などで所々つながって、サフィールは形成されている。また、町の中央には大きな広場もあると言う。

「さて、町に着いたのはいいが、これからどうすればいいんだ？」

「……普通は、寝泊まり出来る場所を確保するでしょうね。幸い、食料とお金はあることですし」

無知な俺をしっかりとサポートしてくれるリク君。実に頼もしい。

シヤロはもはや、マスコットのなキャラクターでしかなくなっている。可愛いから許すけど。

「じゃあ、宿でも探しますか」

俺は一言声をかけ、先に進む。

「そっちは工業区ですよ。宿泊施設がある方向は逆です」

やべえ。これは恥ずかしい。

「はい。三名様ね」

ところ変わってここは町の宿。なんだかんだ言っただけで急な客に対応出来ない場所が多く、俺達は五軒目にしてやっと宿泊先を決定した。

結局泊めてもらえる事になったのは、日本で言う民宿のような場所。

他の場所と違って小規模だが、食事は朝夕の二食出してもらえて、さらに一泊の宿泊費は一人あたり2500ゼーガ。

ゼーガと言うのは通貨の単位で、価値としては1ゼーガ1円相当

らしい。長に用意してもらったのは五万ゼーガなので、そこその出費と言える。何か稼ぎ口が欲しいところだ。

「で、夕食はどうするんだい？ 今から用意するとなると、時間がかかっちゃうんだけどさあ」

宿の入り口のカウンターのところで、人の良さそうなおばちゃんが出てくる。

「俺たち以外に客はいないようで、とくに準備していなかったらしい。」

「二人はどう？」

俺としては、わざわざ準備してもらうのも悪いし、里で貰った物が残っているから別に無理に用意して貰わなくてもいいと思うんだが、やはり二人の意見も聞かなくてはだろ。

「僕は大丈夫ですよ。あなたが好きに決めればいいと思います」

「あ、私も大丈夫ですよ。荒船さんが決めて下さい」

「……酷いな。俺に決めろと言うのか。俺に全責任を負わせると言うのか。」

まあそれでも、

「今日は大丈夫です。長旅で疲れているので、早めに部屋で休もうと思います」

と言っわけだが。

「そうかい？　じゃあ、これが部屋の鍵だよ。その階段を上って直ぐの部屋だからね」

おばちゃんもずいぶんとあっさりしたもので、鍵を渡して部屋の場所を教えてくれた。

「ああ。それから、家の娘に手を出すんじゃないよ」

そして、最後に意味深な事を言った。

俺は二次元の子とロリっぽい子にしか興味無いから大丈夫だと思っけどなあ、とは口に出せなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898p/>

いつかのこと

2011年10月7日22時51分発行